

—OPIの考え方を授業に生かす—

～教師も学習者もくわくわくする授業>をめざして～

アクラス日本語教育研究所

嶋田 和子

kazushimada@acras.jp

本日の研修会メニュー

- I. OPI理論の概略を知る。
- II. OPIを聞いて、判定してみる。
- III. 教育実践に生かす。

ちょっと実践を振り返ってみませんか？
教科書を見てみると～～～。
何が見えてきますか？

I. OPI理論の概略を知る。

→別紙参照

II. OPIを聞いて、判定してみる。

<聞き方のポイント>

- ・どのように質問をしている？
- ・話題をどう展開している？
- ・どんな「聴き方」をしている？
- ・被験者の発話をどう活かしている？
- ・被験者の「間違い」にどう向き合っている？

Ⅲ. OPIで身につく教師力

1) 評価する力

- ・何が、どのように出来るのか「今の力」を的確に判断する。
「今の力」が評価できると、同じ場面・機能でも「相手との関係性」「状況の複雑化」などによって難易度を変えた練習をすることができる。

2) 縦軸思考の重視

- ・「今の力」は、学習目標全体のどこに位置するのか。1つ上のレベルに持っていくには、「何を」「どう」学べばよいのかが明確になる。

3) 突き上げ力

- ・「 $i+1$ 」のタスク(少し難しめのタスク)を与えることで力が伸びる。

4) 質問力

- ・質問のための質問をしない → 「はじめに質問ありき」ではない!
- ・お互いに情報を知りたいという気持ちを大切にする
- ・質問の型を意識する
- ・1問1答にならず、あることについて十分語れるような質問をする

5) 傾聴と共感

- ・質問力の基本にあるのは、「聴く力」

IV. 『できる日本語』の考え方～プロフィシエンシー重視の教科書～

【O P I】=Oral Proficiency Interview

【プロフィシエンシー】

プロフィシエンシーは、「ある技能が求めるタスク（課題）の中で今どんなことが『できるか』という『できること』の束で示す熟達度」と定義……。

(牧野成一 『プロフィシエンシーを育てる』 p. 19)

A. 教科書の元になる教育理念

日本語で「対話力」を養う。つまり、日本語の学びを通して「人とつながる力」を養うことが重要である。

・ 伝え合う力／語り合う日本語 ・ 自己表現のための日本語

B. 特徴

1) 課の行動目標が明記されている。

能力記述文(Can-do-statement)で明記（日本語以外、英語・中国語・韓国語の3カ国語訳付き）

2) 各課のスマールトピックごとに「できること」が明記されている。

能力記述文(Can-do-statement)で明記（日本語以外、英語・中国語・韓国語の3カ国語訳付き）

3) タスク先行型スタイルである。

○文型積み上げ式ではない！！

○場面・状況があり、そこに「課題（タスク）」があって、それを達成するための日本語力を養うという考え方である。

4) 場面・トピックシラバスと文法シラバスとの融合を図ったものである。

○場面・状況の重視

○言語的知識も保障

その場面・状況、あるいはその話題で最も必然性のある文型を選び、場面・トピックシラバスと文法シラバスとの融合を図る。

- 5) 「固まりで話すこと」を初級スタート時から大切にしている。
- 6) <初級・初中級・中級><レベル内>におけるスパイラル展開をめざしている。

V. 学習者に寄り添う日本語支援

「学ぶということ・教えるということ」を考える

学習者が言語運用能力を向上させたいのであれば、教師が取るべき役割は、自分自身を「舞台上に上がった賢人」に見立てるような伝統的なものではなく、むしろ、「側に付き添う案内人」というようなものになるはずである。すなわち、教師側からの話を最小限に抑え、学習者が発話に参加する機会を最大限に増やすという役割である。

『ACTFL-OP I 試験官養成マニュアル』p. 121 アルク)